

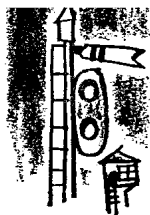
たたかいの歌

山崎 馨

秋元書房刊

たたかいの歌

山崎 かおる 馨



秋元書房

作者のあゆみ



1930年 (昭和5年)東京麻布の町なかに生まれる。
1945年 勤労動員。戦火に追われ、岩手県の農村に疎開。
1948年 北上川に近い町で、新制中学の代用教員になり、英語を教える。
1950年 東京にもどる。
1954年 東京学芸大学を卒業し、小学校の先生になる。
現在 日本文学教育連盟、日本親子読書センター、北多摩文学教育の会、北多摩学校図書館協議会などの会員。
読書指導・文学教育・親子読書等の運動や研究活動に参加。
勤務先 東京都三鷹市牟礼、高山小学校
現住所 東京都調布市深大寺2023
主な作品 「川と大地の歌」秋元書房刊

たたかいの歌

昭和44年5月25日 印刷

昭和44年5月30日 発行

著 者

山 崎 ^{かおる} 馨

発 行 者

秋 元 英 子

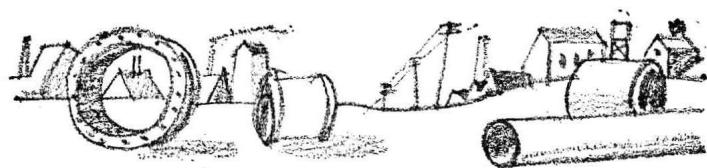
発 行 所

株式 秋元書房
会社
東京都新宿区赤城下町42番地
郵便番号 162
電話・東京 (268) 0758代表
振替東京 27047

乱丁・落丁のものは、本社またはお買いもとめの書店にてお取りかえします

組版 西田整版・皆川印刷 共成社製本

© 1969 Printed in Japan



まえがき

第一部「川と大地の歌」を書きおわった頃、ぼくはまだ、第二部を続けようというはつきりした考えなどまったく持っていなかった。

ただそのあとの主人公の姿と、物語のだいたいのすじとを、時折ぼんやりと頭にえがいてみることもあるというていどだった。

ところがその後、「川と大地の歌」が思いがけないほど多くのかたがたに読まれ、各地の中学生や高校生の人たちから多くの反響をいただき、読書会などにも呼ばれ、「このあと主人公の久枝はいったいどうなるのか」という質問を多く受けているうちに、ぼくの頭の中で、主人公のその後の姿が少しずつはつきりし、さらに、主人公をとりまく友人や同僚や、あらたにひらけてくる職場や、定時制高校の教室などが次々と目にうかび、時には自分が今そのなかにいるような気持ちにさえなってきた、いつのまにか第二部を書かないではいられなくなってしまった。



今、この第二部を読みかえしてみても思ふことは、戦後十年にもならない日本の就職難・生活難の生きにくい社会の中を、自分の力でまっすぐ生き抜こうとしたひとりの少女の生活のあとが、たしかにここにあるということだ。

戦後二十年を過ぎた今、時代や社会の現象面をこえて、ぼくは、この物語を、中学生や高校生、とくに、定時制高校や、通信制高校などで働きながら学んでいる、学ぼうとしている、多くの若いわたがたにおくりたい。

生きること、学ぶこと、について、なにかを感じ、なにかを考えてもらう、きっかけのひとつにでもなればうれしい。



目次

まえがき	7
第一章	11
第二章	63
第三章	128
第四章	159
あとがき	180

え・三浦勝治

へ 第二部から読みはじめるかたに

第一部 「川と大地の歌」のあらすじ

内田久枝は幼い頃、戦争で父を失い、東京空襲の夜、怪我をしてびっこになった少女だが、母とふたりで疎開した岩手県の北上川に近い農村で中学校にすすみ、体や心の傷から消極的になりがちな自分にむち打って、ころびながらもバレーボールをやり、マラソンにさえでたりする少女に成長する。

やっとできた安子という親友を失い、自分も貧しさから高校進学をあきらめなければならなくなるが、早苗さななや久美子という新しい友だちやクラス全体のはげましを受けて、働きながら町の定時制高校に進む道をつかむ。

……こうして中学を卒業した久枝に、またまた思いがけないできごとがふりかかってくる……

第一章

風がふいている。

もう雪はないのに、いちめんの枯草の上をふいてくる風は驚くほどつめたい。折れたささの茎がこまかくふるえて悲しげな音をたてている。

空は重い灰色の雲でいっぱいだ。

四月にはいつてきゅうに春めいた日がきたかと思うとすぐまた冬がかけもどったようなつめたい日がつづく。

ふくらみはじめた草や木の芽もいちじかたくちぢこまり、うたいかけた小川も息をとめ、月日の流れ全体がびたりとこおりつき、少しずつあとずさりをはじめたようだ。

ひろい校庭のむこうに、春休みにはいつてまったく人氣のなくなった中学の校舎が、まるですてられたボール箱のように並んでいる。しめった黒土のグラウンドだけが、土ほこりひとつたえず、風などまったく問題にしないといったふうに、平然と落ちついてひろがっている。そのうえをリヤカーと自転車のタイヤのあとが幾本か、ゆるやかな曲線をえがいて、むこうの校門のほうまではつきりつづいている。

校門をでたあたりの、道路わきのちょっとしたくぼみに、風に顔をさらしたまま、三人の少女がほとんど横一列にならんで、じっと立ちすくんでいる。三人ともひえてかさかさになったほお

をし、風におくれ毛を乱暴にみだされたまま、石像のように動かない。

久枝と、親友の早苗、もうひとりとは高田久美子だ。中学三年まで担任だった宇田先生に重大な相談ごとを持ってやってきたのだが、きょう先生は学校にきていないといわれ、どうしようどうしようと顔を見あわせて歩くうちに、とうとう誰からともなく立ちどまってしまったのだ。

「……三人で、とにかく同じ高校へいけると思ってたのに……」

今にも泣きだしそうな顔を久枝のほうにふりむけて、久美子がいった。オーバーもなく、うすよごれた赤い毛糸のマフラーを首のまわりにぐるぐる乱暴にまきつけただけの久美子は、それだけいうと、たまりかねたように両手を口のそばへ持っていて、はーっと息をふきかけた。

「……そうよ。こんなことになるなんて……私、どうしても久枝ちゃんとかれたくない……」

そういう早苗の声は、久美子以上にうわずってふるえている。うすねずみ色の毛糸の帽子を、まゆげがかくれるほど深くかぶって、耳まですっぽりかくしている早苗だが、色白のほおが、つめたい風で赤紫色にはれあがったようにみえる。えりを立てた紺色の半オーバーを着ているせいか、三人の中で早苗が一番大きく、娘らしくみえる。

「……私だってそうよ……でも、もう仕方がないんじゃないかと思うの……」

そうこたえた久枝が、三人の中でむしろ一番落ちついている。久枝は、悲しんだり考えこんだりしているというよりは、何か今自分のすぐ目の前にあるものをじっとみすえているようなまなざしをしている。たえずむぎをかえてふきつける風のために、髪の毛をめちゃくちゃに乱されながら、それを手でなおそうともしない。久美子と同じような毛糸のマフラーを首にまきつけ、古ぼけてかさかさした、いかにもよく風のとおるようなカーデガンを着ただけで、ほそい体

を風の中でこまかくふるわせているようでもある。

いつもあまり血色のよくないほおが、いっそう青白く、かたくこわばっているようにもみえる。

「……そりゃあ、いろいろ考えたよ。でもね、こうなってしまった以上は、もう、東京へ帰るより他に仕方がないと思うのよ……」

東京へ帰る——それは、早苗や久美子にとってより、本人の久枝にとって、まったく夢にも思つてみなかった突然の事態だった。

中学を卒業し、待望の定時制高校進学を目の前にして、もう教科書まで買いそろえて心をはずませていた久枝にとって、母の時枝といっしょにそれまでおいてもらっていた茂太郎おじの家をだされ、遠い東京へ移らなければならないということは本当につらいことだった。

終戦の年から七年間、久枝と時枝の親子ふたりがひと間を借りてくらしてきた茂太郎の家へ、盛岡で小さな鉄工場を経営していた茂太郎おじの弟一家が、きゅうにころげこんでくることになった。経営がゆきづまり破産したのだ。弟一家は四人の子どもをかかえる大家族だ。

広くもない家がきゅうに手ぜまになるだけでなく、ふだんからそう豊かなほうではない茂太郎の家にとって、これはまったく大変な事件だった。

時枝はすぐ東京にいるふたりの弟に相談をかけた。戦前から東京の板橋で会社づとめをしている「やすおおじちゃん」から、おりかえし返事がきた。

「……そういうことになった以上、ねえさんたちは思い切つて東京にひきあげてくる他ないと思う。さいわいに久枝ちゃんも中学をでたところだから、親子ふたりで働けばなんとかやっていけないことはない……とにかくアパートにひと間みつきりそうだ。むろん、戦後の仮りの引きあげ

寮にちょっと手をいれただけのひどいものだが、今の東京では、ぜいたくはいってられない。それに就職難時代だから、つとめ先も思うようにはならないが、なんとかさがしてみよう。とにかく、茂太郎さんの家にはもういられない。このことだけははっきりしている……」

久枝はつらかった。こうやって定時制進学という進路をつかむまでのさまざまな苦しみを思いだすと、せっかくなんだその道からどんなことがあっても引きはなされたくないというはげしい気持ちにおそわれた。全日制にすすむ早苗とはいくらかはなれても、あらたに得た久美子という友だちといっしょに働きながら高校の勉強をしていくという生活にむかって、とびたつような喜びを感じていた久枝だったのだ……

風が音をたててふきつけてくる。

久枝は、みえるようなまなざしを、すぐ足さきの枯草のしげみにむけたまま、無意識のうちに両方のてのひらを、ひえきった自分のほおへそとあてた。

「……どこかこのあたりで、私たち親子をおいてくれる家をさがすっていうことも考えたわ。でもね、母にしてみると、東京は生まれて育った場所でしょ。自分の兄弟がいる所でしょ。たしかに私の母には、こういう農村で、農家の手伝いをして働くよりも、つらくても東京で働くほうがいいと思うのよ。それに、私がまだ中学生だったら、母はひとりで働かなければならないけど、今ならもう私だって、どこへでもつとめられる。母にだけ無理させなくてもすむわ。ね、そうでしょう……さんさん考えてみて、私たち、やっぱり東京のおじさんのいうようにするほかないということになったのよ」

それだけいうと、久枝は、はじめてとなりの久美子のほうへ視線をむけた。

「……それで、久枝ちゃん、学校はどうするのよ、せっかくきまった学校は……」

久美子のさしとおすようなきびしい視線ががちりと合った。

「いくわよ。つとめ先をきめたら、すぐ、なるべく近い所の公立高校を探すわよ……きのう、町の高校へ行ってきいたら、あんたはこっちでもう定時制入学の資格をとったんだから、東京へいってはいる場合は、もう試験は受けないでいい。こっからの証明書で、転入学のような形ではいれるはずだって……」

久美子はだまってうつむいた。久枝のいうことはよくわかるけれども、いっしょに同じ夜間高校にかよえると思っていた久枝がきゅうにはなれていってしまうことが、久美子にはどうしてもがまんできないのだ。

「ね、こんな所にいつまで立っていてもはじまらないよ。とにかく先生の家へ行ってみようよ」横から早苗がいった。

——先生の家へ行っても……と久枝は思った。先生はきつとなぐさめはげましてくれるだろう。でも、こうしてきゅうに東京に移らなければならなくなったことについては、先生だってどうしようもないのだ——

早苗は、まだ歩きだそうとしない久枝と久美子の肩に、うしろから同時に手をあてて、そっと押しだすようにした。

三人は、くぼみから、ゆっくり坂道へでた。

風がふきつけてくる。鉛のように光ってみえる北上川のほうから、枯れた田んぼをわたってまともにふきつけてくる。その中で、久枝の髪の毛はいちどにおどりあがり、耳の両わきで音をた

ててゆれた。

母の時枝は、東京に帰ったら自分が働いて久枝を昼間の高校へいかせるといい張った。

久枝は反対した。第一に、昼間の高校へいくには試験を受けなければならぬ、今頃そんな試験を受けさせる学校などないにきまっているということ。第二に、働きながら学校にいく決心をして定時制を受けて合格した以上、東京にいくがどこへいこうが決心したとおりの生活にとびこんでみなければ気がすまないこと。もし万一昼間の高校へいくことになったとしても、久枝はどうせやれる限りのアルバイトをして、母の負担を少なくしようと努力するだろうから、働きながらの高校生活になることには変わりない。そうだとすれば、はじめにきめたとおり、昼働いて夜の学校にいくやり方でやりたい……

「もし万一かあさんに、らくでしかも月給のいい仕事があったとしても、私はやっぱり働いて定時制にいくわよ」

久枝はがんこにそういつづけた。

東京のおじからつづけて手紙がきた。

時枝のつとめ口として、ある大きな病院の窓口の受けつけの仕事がみつかったこと。月給はやすいが、そのかわり時間がきまっています、そうきつい仕事ではなさそうだということ。

——かあさんの仕事さえきまれば、久枝ちゃんも東京にきてから自分で探せばいい。せっかくそっちでとった定時制高校の入学資格を東京にきてそのまま生かせるようにやってみるといい。アパートもきまったら、もう、あしたにでも出発してきなさい——手紙はそう結んであった。

「ほーらごらんさない。おじさんだってこういつてるじゃないの！」

久枝は、考えこんでいる時枝の肩をぽんとたたいて、うれしそうにいった。

「そうなの。それじゃあやっぱり、東京さいくことにきまったんだね……」

久美子は久枝の手をにぎりしめながら、おこったようにいった。

久枝がこっくりうなずいてみせると、久美子はきゅうに泣き顔になってうつむいた。

「久美ちゃん、そんなに悲しまないでよ……ね。なにももうこれっきりあえないわけじゃあるまいし……」

久枝も泣き声になって、やつのことでそういった。

「手紙をだしあおうよね……久美ちゃんは岩手で、私は東京で、はなれてたって、ふたりとも同じように働いて、同じように学校へいくんだもの……ね、がんばろうよ」

久枝は、久美子の手を強くにぎりかえた。

久美子は顔をあげた。

「久枝ちゃん、ほんとにがんばるんだよ。いいね。つらいから学校やめるなんていっちゃだめよ……久枝ちゃんは、どんなことがあっても高校を出て、大学へでもいかなきゃだめよ。久枝ちゃんは、気がすむまで勉強しなければいけない人なのよ。ね、わかった？　しっかりがんばるのよ」

「ありがと、久美ちゃん……」

ふたりはあく手した手にありったけの力をこめ、必死になって笑顔をみせあいながら、ぼろぼ

ろ涙をこぼした。

とうとう出発する日がきた。

上野行き夜行列車に乗るために、両手に大きな荷物をさげて、町にむかう夕方の道をゆっくり歩きたした。

歩きだしてみると、久枝は、目の前に大きく波をうっている山なみの、見なれたでこぼこのひとつひとつにも、すぐそこに一本ぼつんと立っているユブシの木にも、田んぼのずうっとむこうの高台に、小さくみえている中学校の校舎にも、まったく思いもかけないほどのたまらないなつかしさを感じはじめた。

そのくわ畠のむこうを、あの大きな川、北上川がゆうゆうと流れているはずだ。かけだしていつてもう一度見てきたい。おちついた水音をひびかせ、銀色に光って動いているあの川の姿をもう一度見てきたい。いつてこようかな……

そんな気持ちがかたまりになって胸の中でぐんぐんふくらんでくる。

———
なにもこれっきり見れないわけじゃない。いつかまたきつとくるわ。友だちにあいにく、こ
ういう山や木や川を見に———

そう思っただめようとしてもだめなのだ。そればかりか、七年前、母とふたりでこの土地にきて以来の生活全体が、たまらないほど大切な尊いものに思われてきて、涙がこみあげてくる。どうしてなんだろう。つらいこと、いやなことが多かったはずなのに、どうしてなんだろう。どうしていろんなものが、こうまで自分を引きとめようとするのだろうか……

久枝にはわからなかった。ただ、となりを歩いている母に涙をみられまいと、わざとそっぽをむき、空に顔をむけたりして歩いた。

ところが、町に入り、駅に近い踏み切りまできたとき、久枝は突然、この線路のつづく先にある東京という大きな黒いかたまりを意識した。

そうだ。東京、その東京へ私は帰るんだ。

東京という二つの文字が、目の前の大きな機関車の車輪のように、頭の中でぐるぐるまわりだした。

恐怖にいた、体が足の方からふるえだすような、なんともいいようなない感情がふくらんでくる。

久枝にとって、東京とは、たしかに恐ろしい所の代名詞だった。

むりもない。七年たった今も久枝はこうしてかすかながらびっこをひいている。そんなに深い、一度とともどおりにはならない傷を久枝の足にくわえたのも、あの空襲下の東京ではないか。考えてみると東京は、久枝にとって恐ろしい、そっとするような思い出にみちていた。

幼い久枝が育った練馬の家は、大きな陸軍の兵舎のすぐ近くにあった。家のうしろから、いつも家をずいといんとゆさぶりあげるような大砲の音や、つきさすような機関銃の音や、けだものの叫びのような兵隊たちの声などがきこえていた。夜中にそういう物音で目がさめ、よく母にしがみついて泣いた。なにかまっ黒い大きなものが火をはきながら少しづつこっちへ近づいてくるような気がいつもした。

何千何万とも知れない兵隊の列が、黄色い土煙りをまきあげて幼い久枝の目の前を流れていっ

た。地面を踏みつけるどっどっどという足音が、夜なかにも、夜明けがたにもひびいてきた。遠い戦場へあとからあとからすいこまれていく兵隊たちの足音だった。父が入営して以来、久枝はそういう足音をきくたびに、その中におとうさんがいるような気がして、かけていってそういうおとうさんを自分のほうへひきずってきたい気持ちにかられた。胸がどきどきし、いつまでも眠れなかった。

それから、まっ暗な燈火管制の夜のこと。底が冷くて今にも上からどさりとくずれてきそうな防空壕の中。焼夷弾がおちてくる時の無気味な機械音……

——ばかだな久枝は。いつまでも戦争の時の東京じゃないんだよ——

久枝は思いなおそうとして自分にいきかせた。そりゃあまだ少しは空襲のあとが残っているかも知れないけど、今の東京はもう大部分立ちなおっているはずだ。新しい東京として姿をかえているはずだ。

久枝は、腕がしびれるほど重くなってくる荷物を、齒をくいしばってひきずりあげながら、頭の中の暗い記憶をはねのけようと顔をあげ、機関車がふきあげるまっ白い蒸気のかたまりを必死になって目で追った。

——でも、ほんとに、東京へいって、私の職がすぐみつかるとかしら……定時制高校へもかよわせてくれるようないい職場が、すぐにみつかるとかしら……東京は、すごい就職難だっていうけど、だいじょうぶなのかな。いったいどんな仕事につくことになるのかな。

——なあに、がんばるさ。どんな仕事だっていい。一生けん命やるわ。高校へいくためだもの。夜の高校へさえかよわせてくれるなら、どんな所でもいい、どんな仕事でもいい、一生けん